

第16部会

導きの超越的根拠については、その内容が、本人がすでに十分倫理観を踏襲している可能性もある。また、導きが恣意的になる危険もある点に、注意を喚起しておく。

第二の、戦後日本との関わりを述べる。日本においてこの運動が盛んになったのは一九四〇年前後と、終戦後一九七〇年代頃までである。戦前はキリスト教的倫理運動の面がもっぱら目立つが、戦後はO.G.M.の国際的なネットワークを活かした超宗教的活動が多くなる。O.G.M.は、ドイツと日本も含めた新しい世界の建設を提唱し、政財界の有志青年が海外の政財界人と交流する機会を用意し、日本の諸国との国交回復にも重要な役割を果たしたとみられている。

第三に、これらの担い手たちのモチベーションを高めるものとして、心なおしが存在していた点を強調しておく。海外で学ぶためだけに、また海外の情報を得るためだけに参加した人々も、心なおしに感化され、熱心に活動に参加するようになっていったのである。

西田天香の宗教教育論

河村新吾

一 はじめに

本提案では、新たな宗教教育論を模索するものである。二〇〇六年教育基本法は改正され、これまでの規定にあった「宗教

に関する寛容の態度」及び「宗教の社会生活における地位」に加えて、新たに「宗教に関する一般的な教養」を教育上尊重すべき旨が盛り込まれた。それに伴い、学習指導要領上も宗教教育の充実が予想される。今後どのような宗教教育が、学校教育において必要とされるのであろうか。

二 西田天香と一燈園

西田天香（一八七二—一九六八）が始めた一燈園という共同生活は、一九〇四年から始まり現在に至っている。その特色は、「自然にかなった生活をすれば、人は何物をも所有しないでも、また働きを金に換えないでも、許されて生かされるという信条のもとに、つねに懺悔の心を持って、無所有奉仕の生活を行っているところだ」（<http://www.itoen.or.jp/index2.htm>）一燈園のHPより引用）とある。その教育機関である一燈園は、小学校から高等学校までの一貫校である。当初は、一燈園に属する同人のための施設であったが、現在ではそれ以外の子弟も広く受け入れを始め、高等学校からは、全員寮生活を営んでいる。礼堂における朝の「祈り」から小中高等学校生活が始まったり、高等学校のいわゆる修学旅行では、トイレ掃除のために家庭訪問をしたりするという宗教的雰囲気のある教育実践が行われている。

毎年十一月に「秋の学習発表会」として、小中高等学校が礼堂でいわゆる文化祭を行う。二〇〇八年度の発表会では、小学校三四年生合同でジュール・ベルヌ作の「十五少年漂流記」が演じられた。それに焦点化して、懺悔の心について考察してみたい。

三 語られざる宗教教育論

学校教育を中心とする教育が Formal Education であれば、学校教育外の組織だった教育は、Nonformal Education であるといえる。さらに、組織的でもなく無意図的偶発的な教育は Informal Education となる。教育史的にいえば、Nonformal Education から Formal Education へと発展していった。西田の宗教教育はどこに位置づけられるのであろうか。Formal Education としての宗教教育は、第二次世界大戦における国家神道の強制による反省から事実上消極的に理解されている一方で、「じゅくりさん」や「トイレの花子さん」に代表される Informal Education としての宗教教育が、日本の学校教育の場合、蔓延しているといえる。西田によって始められた一燈園生活では、授業などでは宗教を直接教える事はないが、諸宗教を尊重するという態度がある。また共同生活そのものが宗教的な雰囲気がある。その中で Informal Education としての宗教教育が、その生活に収斂されていく。

その中であって学校教育の集大成として修学旅行があるならば、それがトイレ掃除であるという点に注目したい。トイレ掃除そのものが一般的に厭われるものである上に、何軒も断られるという体験が重なる。それは自己を中心とした世界観や身体観を崩壊させる体験であるともいえる。これらを通して子どもたちは何を学んでいくのであろうか。ここに西田の宗教教育の語られざる本質があるということを検討したい。

接触領域としてのオリシヤ崇拜

——アメリカ黒人の社会宗教運動——

小池 郁子

本発表の目的は、同じ「人種」と「抑圧(被害者)の歴史」を共有しているとされながらも、「近代/未開、抑圧/被抑圧」という植民地主義的な関係に位置づけられてきた「アメリカ黒人」と「アフリカ大陸の黒人」が、宗教的移動によって互いの文化に接触しながら相互交渉をおこなう、という事象を文化人類学的調査にもとづいて検討することである。

具体的には、アメリカ黒人(アフリカ系アメリカ人)のオリシヤ崇拜運動と「アフリカ」が接触する社会空間を取り上げる。この社会宗教運動は、一九五〇年代半ばのアメリカ合衆国で、公民権運動が広がりを見せるなか、「反白人・反キリスト教」を掲げて始動した。彼らは、アメリカ黒人にはみずからの文化を実践する場所が必要であるという思想哲学から、アメリカ合衆国南部に、オトウング村という一種のコミュニティ(生活実践共同体)を拠点として建設し、そこでオリシヤと呼ばれる西アフリカのヨルバの神々を崇拜し、ヨルバの伝統的な生活様式を再現しようとした。

一九八〇年代半ばから、このオリシヤ崇拜運動は転換期を迎えることになった。それにもなつて、運動の成員であるアメリカ黒人のなかには、宗教・文化的な知識と技術(たとえば、